

月曜評論

中ソの外交攻勢と日本



中嶋 嶺雄

一時期、キッシンジャー外交が華々しい成功をおさめ得たのは、みずから世界の超大国として数多くの切り札を手にしていたアメリカが、米中ソ三極関係のなかで激化した中ソ対立に直面し、世界の力のバランスの変数を自在に計量できたからにはほかならない。その同じキッシンジャー外交も、中東戦争やキプロス紛争さらには対産油国外交では、けっして華々しい成果をおさめたとはいえなかったし、

中ソ双方がすでにアメリカの手のうちを知りはじめ、力のバランスの変数を彼ら自身も計量しはじめたとき、アメリカの対中・対ソ外交もその簡単に動かはなくなってきた。

ソ双方を離隔として直面してゆかなければならない日本は、今日、大きな外交的試練の場に立たされている。いうまでもないが、日中平和友好条約交渉をめぐって生じた中ソの外交攻勢にたいして、将来の日中・日ソ外交をどのよち方向につけてゆくべきかという問題である。

ソ双方を離隔として直面してゆかなければならない日本は、今日、大きな外交的試練の場に立たされている。いうまでもないが、日中平和友好条約交渉をめぐって生じた中ソの外交攻勢にたいして、将来の日中・日ソ外交をどのよち方向につけてゆくべきかという問題である。

これにたいして、この一月中旬には自民党の実力者がたいする中ソ双方の働きかけは、まさに並列なものであった。しかも、周到にも中ソ双方は、わが

告を発している。本紙二月十六日付社説「中ソ対立の中の外交選択」は、この問題で数多く新聞社説のなかでも、ひときわぬきんでた卓説であった。その後処理案件を残す日ソ平和条約とは根本的に性格を異にするものであって、日中共同声明での

き間風を巧みに利用して、中国側は主として露が関にたいし、ソ連側は露が関の反撥を予想してか、むしろ直接、内閣・官邸や自民党実力者にたいして執拗に働きかけてきたのであり、ある種のキャスティングボードを握ると思われた河野参院議長などは、二月十八日にはト

勢にたいしては、世論もマスコミもかなり冷静であり、国会での議論もいまのところ過熱しそ

に照して即座にこれを警告し、後者にたいしては、日中共同声明とはちがって、二国間の条約制にもかかわらず遂行しなればならないとする政府・外務省の見解もそれなりに正当なものである。

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

にわが国がいかにか論理的な選択をおこなおうとも、今日の日中ソ三角関係の現実と、日ソ関係に比較しての日中関係の現実に照してみれば、少なくともソ連側は、わが国は、日中関係についてはソ連の反応をあまり考慮しないのに、日ソ関係では中国の反応ばかりを考慮していると考えるであろう。そして、日中関係の改善にあたり、このような難題が将来の日本外交にさまざまな拘束力をもつであろうことを、わが外交当局が十分に予想しなかつたことも事実である。こうして、米中ソ三極構造下のキッシンジャー外交以上の困難さが当面の日中三角関係には存在しているのである。連日の中ソ外交攻勢に耐えて、さらに長期的展望をもつ余裕を、日本外交はますます失つて見出さねばならない。

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

これら一連の動きのなかで、去る二月十三日、ブレジネフ親書を携えて三木首相を訪れたト

(東京外語大助教)